ノラネコデイズ

吉田　とら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ノラネコデイズ

【Ｎコード】
Ｎ９７１５Ｏ

【作者名】
吉田　とら

【あらすじ】
ノラ猫は毎日が生と死の背中合わせ。黒猫たまゆらと悪友かぐらも例外ではない。それでもののんびり生きている。泣いて笑って、ほのぼのノラネコデイズ。
お手軽に読める掌編８話完結。

※語尾を「にゃ」等にしなければならないという「ねこバトン」から派生した掌編につき、地の文が若干読みづらくなっております。仕様です。ご了承ください。

的外れ・にゃ

吾輩は猫にゃの。ノラ猫にゃの。
どのくらい猫っぽいかとゆーと、しっぽと耳があるにょ。
あ！
ドンキ・ホーテで買ったワケじゃナイにゃ★

吾輩にゃんこたちは、毎日が戦争だにゃ。
家猫のコトは知らにゃいけど、少にゃくとも、ノラ猫は毎日が、生と死、背にゃか合わせで生きてるにゃ。
昼間いつも寝てるクセに、とか、そーゆうご意見は即却下にゃ。
そもそも、吾輩は夜行性だもんにゃ。
だから決戦は夜。
そう。夜なのニャ。

「たまゆら！」
名前を呼ばれた吾輩は、もちろん振り返ったにゃ。
実はみんなには隠してるケド、ホントは、吾輩はつい最近まで家猫だったにゃ。
だから、名前を呼ばれると、ついつい返事をしてしまうにゃ。
「にゃんだ。かぐらではにゃいか。どうした？」
言葉を返すと、ミケ猫のかぐらは、塀の上から吾輩のところまで、しなやかに下りてきたにゃ。
「たまゆら。いい獲物を見つけたのにゃー。一緒に行くにょ」
「おにゅしは確か、先日もそう言って、吾輩を江崎さんちの番犬の前に連れて行ったではにゃかったか？」
「残念。猫は3日前のことはキレーさっぱり忘れるにゃ」
かぐらはそう笑うと、吾輩のしっぽを引っぱった。
確かに。せっかく猫にゃのだから、3日以上前のコトに執着する

のもみっともにゃい。
そぉいうワケで、吾輩はかぐらについて行くことにした。
今宵は新月。黒猫の吾輩にぴったりの夜だにゃ。
かぐらに連れられて、歩くことにゃにゃ（7）分。
「この垣根の向こうだにゃ。この家の人間は、生ゴミを庭に埋める習性があるにゃ」
「それは好都合だにゃ。して、番犬は？」
「この家にはいないにゃ。確認済みだにょ」
「でかしたぞ、かぐら」
かぐらを褒めると、吾輩達は垣根の下をくぐった。
目の前に、何かを埋めた痕跡を認めると、早速かぐらと穴を掘り始めたにゃ。
しかしそこから出てきたのは、生ゴミではにゃかった。
えんぴつ、消しゴム、ビー玉、おはじき……。
「生ゴミではにゃいではにゃいか！」
「あれぇ。昨日は魚あったにょに……」
「フン。信じられんにゃ」
かぐらと言い争いを始めたそのときだった。
カラカラカラ、と。サッシを開ける音が聞こえたにゃ。
まずい。言い争いの声が聞こえてしまったようだ。
焦ったところに、その人間は、信じられない言葉を放った。
「たまゆら」
名前を呼ばれた吾輩は、もちろん振り返ったにゃ。だって吾輩は、もとは家猫。
猫は3日で人間の顔を忘れるとゆうが、あれはウソにゃ。
たった今、それがわかったにゃ。
「もう、ここに来るなよ」
そんな言葉を背中にききながら、吾輩達は走ったにゃ。
とおくに、とおくに走ったにゃ。

吾輩は猫にゃの。ノラ猫にゃの。
「たまゆら、泣くにゃよぉー」
「泣いてなどおらにゅ。目にゴミが入っただけにゃ。それよりも、今日も的外れだったではにゃいか。収穫がビー玉1コとはにゃにごとだにゃ」
しかも、とんだ的外れだにゃ。
「でも、転がして遊べるにゃぁ」
転がるビー玉は、きらきら光って、ただひたすらにキレイだにゃ。

吾輩にゃんこたちは、毎日が戦争だにゃ。
だから、泣いているヒマにゃど、ナイのにゃ。

ドワーフの斧・にゃ

吾輩は猫にゃの。ノラ猫にゃの。
名前はたまゆら。実は昔、家猫だったこともあったにょ。
ノラ猫は、毎日が戦争だけど、毎日が平和だにゃん。

吾輩は今、斧を作っているにゃん。
ある日、悪友かぐらが誤って吾輩をマンホールに突き落としてしまったにゃ。吾輩もとっさのことで着地を失敗して、気を失ってしまったのにゃ。そして吾輩が目を覚ますと、そこはドワーフの村だったという寸法にゃ。
もとの世界の戻る方法もわからにゃいので、いっそのことドワーフの村に馴染むことにしたにゃ。
ドワーフと言ったら、むろん鍛冶屋だにょ。だから吾輩は今、鍛冶屋に弟子入りして、斧を打ってるにゃ。
「たまゆら」
窯の前で汗を流しながら斧を打っていると、ドワーフのおぢさんが声を掛けてきたにゃ。この人は吾輩のお師匠様にゃ。猫のコトバも理解できる、物わかりのいいドワーフにゃ。
「たまゆら、いい知らせだ！　元の世界に戻れるかもしれないぞ！」
「それは本当かにゃ、ありがたいにゃ！　して、その方法は？！」
吾輩はお師匠様の朗報に飛びついたにゃ。ドワーフの村もいいけれど、やっぱり今まで住んでいた世界が性に合うからにゃ。
「竜のウロコをおでこに貼って、呪文を唱えるんだ。
呪文は、ルレエカニィカセーノトーモ。わかったか？」
「うむ。呪文は頑張って覚えるにゃ。しかし、その竜のウロコとやらは、どこで手に入るにゃん？　お魚のウロコじゃダメにゃのか？」
「安心しろ。竜は裏山に棲んでいる」
にゃんと。ゴールは目の前ではにゃいか。

すると、お師匠様は言葉を続けたにゃ。
「でも、竜の皮膚はとても堅いんだ。だからこそ、オラたちが作ったこのドワーフの斧が必要になる」
「ふつうの刃物ではダメにゃのか？」
「そうだ。このドワーフの鍛冶技術を駆使して作った、ドワーフ製の斧でなければ刃が立たない」
「わかったにゃ。では斧を1本借りていくにゃ。お師匠様、お世話になったにゃん」
吾輩がそう言うと、お師匠様は目を丸くしたにゃ。
「たまゆら。竜が怖くないのか？」
「竜とやらは、そんなに怖いものにゃのか？　吾輩は江崎さんちの番犬より怖いモノは知らにゃいニャ」
そうしてお師匠様に別れを告げると、吾輩は裏山に向かったにゃ。
吾輩は竜とやらを見たことがないが、お師匠様の話によると、身体はにょろにょろと長くて、全身ウロコに覆われているということだったにゃ。特徴がわかりやすいから、すぐ見つかりそうだにゃん♪
案の定、にょろにょろはスグに見つかったにゃ。ヤツめ、岩の間でお昼寝中にゃ。予想外に巨大だけど、問題はなさそうだにゃ。
吾輩はドワーフの斧をコソコソと使って、ウロコを1枚いただいたにゃ。斧を振り上げるなんてとんでもにゃい。下手に衝撃を与えたら、目を覚まして怒られてしまいそうにゃ。
ふと。
とあるモノが、吾輩の目に留まったにゃ。にょろにょろのあごの下あたりに、ヘンテコな形の鱗があるにゃ……どうやら、逆さまにくっついてるみたいだにゃ。
これだったら、斧を使わなくてもスグに取れたかもしれないにゃ。
そう思って、その鱗に触れた、その瞬間。
岩場に突如、咆吼が轟き渡った。
しまった、にょろにょろが目を醒ましてしまったにゃ！
その眼が吾輩の姿を捉えると、にょろにょろは鋭い爪を振り下ろ

してきたにゃ！
紙一重でそれをかわすと、吾輩はふもとに向かって走り出す。
そういえば、思い出したにゃ！たしか、韓非子（かんぴし）という書物に、逆鱗（げきりん）とかいう竜の鱗に触れると殺されてしまう話があったにゃ！
いや、そんな故事成語を思い出しているヒマはないのにゃ。
吾輩はとにかく走ったにゃ。なんとしてでも逃げ延びて、元の世界に戻るのにゃ。元の世界に……。
吾輩はハッと気付いて、急いでおでこにウロコを貼り付けたにゃ。今戻ればいいのにゃ！　呪文は、えーと、えーと。
「るれえか、にぃかせーのとーもー！」
次の瞬間、目の前が真っ白になったにゃ。

「うそっぽいにゃ」
だのに、吾輩の話を、かぐらは一言で一蹴したにゃ。
吾輩をマンホールに突き落として、この言いぐさはいかがなモノかにゃ。
「嘘じゃないにゃ。大スペクタクルだにゃ」
「だいたい、たまゆらが斧を打つところから怪しいにゃ」
「ムム、しかしここに証拠のウロコがあるにゃ。ほれ」
「……鯛の匂いがするにゃー」

ノラ猫は、毎日が戦争だけど、毎日が平和だにゃん。

2月のカプリッチオ

吾輩は猫にゃの。ノラ猫にゃの。
名前はたまゆら、性別メス。色は黒。

2月の風は冷たい。
家猫の頃は思いもしにゃかったが、捨てられて、初めて気づく四季のかほりだにゃ。
まぁ、猫は3日前のことは忘れてしまうから、家の中の暖かさなんてもう忘れてしまったケドにゃ。
「たまゆらー」
日当たりの良い塀の上でひなたぼっこをしていると、眼下から三毛猫が吾輩の名前を呼んできたにゃ。
彼はかぐら。吾輩の悪友だにゃ。
「どうした、かぐら」
「大変なのにゃ。助けて欲しいニャ」
かぐらはなにやら焦っている様子。
「江崎さんちに落とし物をしてしまったにゃ〜」
にゃんと。江崎さんちといえば、大きなワンコがいる家ではにゃいか。
「それで……吾輩に取ってこい、と？」
かぐらは黙ってコクリと頷いた。
オスのくせに、どうしてこうも気が弱いのか。悪友の頼みだから、聞いてやらにゃいでもないが。
吾輩は仕方なく、塀の上からするりと降りたにゃ。
「やっぱりたまゆらは格好いいにゃー」
「おにゅしも、ちっとは強くなるにゃ」
そう言って歩き出すと、かぐらもトコトコついてくる。
「まったく。今日は久しぶりに走ったから、ゆっくり寝ていたかっ

たのに」
「たまゆらも走ったのか？　おいらも久しぶりに走ったにゃ」
「おにゅしのことだ。どうせ江崎さんちから走ってきたのであろう？」
「にゃはは」
ちらりと一瞥すると、かぐらは照れ笑いをしている。
どんくさいところがなければ、男前ももう少しあがるだろうに。

果たして目的のモノは、江崎さんちの庭のド真ん中に落ちていたにゃ。
「かぐらはここで待っていろ」
吾輩はそう言うと、気配を消して庭に入ったにゃ。
そろり。
そろり。
もひとつそろり。
突然ワンコが身じろぎをして、ドキリと心臓が跳ね上がる。
ただの寝返りだったと安堵して、もひとつそろり。
そうしてようやく目的のモノにたどり着くと、その端をくわえてあとは猛ダッシュだにゃ。
垣根を越えると、そこには不安顔のかぐら。
「たまゆらっ、無事で良かったにゃー！」
かぐらが飛びついてきたのをひらりとかわすと、吾輩はくわえていたモノをその場に置いたニャ。
よく見てみると「2～4才用キャットフード・まぐろ味」と書かれている。キャットフードだにゃんて、ノラ猫にとっては高級品。しかもまぐろ味。にゃんでこんなモノをかぐらが持っているのか。
「さっきペット屋の裏で手に入れたにゃ。久しぶりに走ったにゃ」
久しぶりに走ったと言ったのは、江崎さんちからではなかったのか。
「ほう、やるではないか」

「たまゆらにあげるにゃ」
バレンタインだから、と目の前のかぐらが照れ笑い。
……ちょっと待つにゃ。
「かぐら。気持ちは嬉しいが、いろいろと間違っているにゃ」
「にゃ、にゃんで？！」
「まず、バレンタインは人間のイベントにゃ。それから日本ではキャットフードじゃなくてチョコを渡すのが主流だにゃ。しかも、メスからオスに渡すにゃ」
「そんにゃあ」
「それから一番間違っていることがあるにゃ。プレゼントを渡す相手に、ワンコの庭から取り返してもらうというその精神が間違ってるにゃ！」
「あ……」
それもそうだにゃ、とかぐらはうなだれる。
それを見て、吾輩は思わず吹き出してしまった。
「まぁよい。かぐらの気持ちはちゃんといただくニャ」
「ホントか？！　よかったにゃ～」
目の前のかぐらが、ふにゃんと笑ったにゃ。
家猫の頃は思いもしにゃかったが、捨てられて、初めて気づく同胞（はら）の情（から）だにゃ。

でも、かぐらにあげようと思って、先刻おもちゃ屋の裏で手に入れて必死で走って持ってきたネズミのおもちゃは、しゃくだからもうしばらく隠しておくのにゃ。

滝を巡る旅・にゃ

吾輩は猫にゃの。ノラ猫にゃの。
名前はたまゆら。黒猫、メス。

夏と言えば暑いのは定番。もちろん猫だって暑いのにゃ。特にアスファルトの熱ときたら、地球にも肉球にも優しくない。
だからこの暑さから逃れるために、今日は滝巡りをしているにゃ。吾輩は泳げはしないけれど、少しでも水に近い所にいたいのにゃ。
というわけで、まずはココ。
吾輩の中では名所だと思っている場所にゃ。一筋の白滝が絶妙な高さから落ちてくる。周りの木陰が、それをいい感じに演出する。
ぼんやりと見ているだけで、何か涼しいモノが、身体の中にすっと染み入りそうな感覚に襲われるにゃ。まるで魔法の白糸にゃ。実に質素、だけれど実に趣深いのにゃ。
そこから北へしばらく行くと、またもや名所がある。
今度は三つの滝がひとつの滝壺に落ちてくるのだが、その落ち方がまたまた絶景。
下部の方で交差して、キラキラと水面が光る。水しぶきはプリズムの役割を果たして、滝の上部にうっすらと虹が架かる。神秘的でワクワクするにゃ。
最後は、あの海に近い場所。
たくさんの水がいっぺんに流れてくる光景は圧巻。まるでニャイアガラの滝を彷彿とさせるにゃ。
この雄大な気分。見ているだけで、ここは日本にゃのかと疑いたくなるにゃ。
「雄大な気分はいいんだけどさ」
吾輩の隣で、同行してきたかぐらがぽつりと呟いたにゃ。
「これって排水だよね？」

「この町は田舎だから仕方あるまい」
ニャイアガラを眺めながら、吾輩はトリップ中にゃ。かぐらのヤツ、急に現実に引き戻さないで欲しいニャ。
確かにかぐらの言うとおり、この町には下水が通っていないから、排水も混ざっておるやもしれぬ。でもそんな単語を使ってしまえば、風流も何も無くなってしまうではにゃいか。
ちなみに、この川は河口の部分が段差になっていて、小さな滝を形成しているのにゃ。まあ、人様からすれば小さな滝かもしれにゃい。でも、吾輩たちから見れば、十分に大きな滝にゃ。
ゴウゴウと音を立てるニャイアガラの滝を見上げながら、かぐらは回想を始めたにゃ。
「一つ目の滝は、山田さんちから川に流れてる排水だよね」
「白糸の滝にゃ」
「二つ目の滝は、一宮さんちと田島さんちと加納さんちから川に流れてる排水だよね」
「三叉の滝にゃ」
「三つ目は港から流れ……」
「ニャイアガラにゃー！」
吾輩は思わず毛を逆立てたにゃ。
かぐらめ。だから、吾輩を現実に引き戻すでにゃい。猛暑でへたり込んでしまうにゃ。
吾輩はかぐらをねめつけると、低い声で唸ったにゃ。
「それ以上言うと、凹ますにゃ」
「……ゴメン」
「よし。じゃあ次の滝に行くにゃー♪」
気を取り戻して出発の号令。そんな吾輩に、かぐらはまたもや余計な一言。
「次は何丁目？」
「……かぐらは江崎さんちのわんこの庭にでも行くといいにゃ」

まだまだ猛暑は続くのにゃ。

シロクマの悲嘆・にゃ

吾輩は猫にゃ。名前はたまゆら、黒猫にゃ。

夏はサイアクにゃ。なぜなら、黒い色には熱が籠もるからなのにゃ。吾輩は太陽の光をふんだんに浴びて、朝からすでにぐったりにゃ。

「たまゆらー」

誰かの家の縁側で寝転がっていると、庭の方からのんびりとした声が聞こえてくる。

見てみれば、こちらを見上げている悪友かぐらと目があったにゃ。

「たまゆら、大変だにゃ。シロクマがいるにゃ」

「……にゃ？」

ホントにこいつの言葉はイミフメイだから困るのにゃ。シロクマが一般のご家庭近隣に出没するハズがないのにゃ。南極だか北極だか、お手軽に考えても動物園でしかお目にかかれますまい。

それでもかぐらが必至に吾輩の首もとをくわえて引っ張ろうとするので、吾輩はしぶしぶ立ち上がったにゃ。

「で、どこにいるのにゃ」

「江崎さんちにゃ」

「……にゃ？」

だからホントにイミフメイなのにゃ。だから、シロクマは一般のご家庭近隣に出没しないのにゃ。だから江崎さんちに居るのは犬であろう。

そもそもかぐらの声自体に緊迫感が感じられにゃい。

しかし、いざ江崎さんちに到着してみると、そこには確かに白いモフモフが存在していた。

白いモフモフ、白いシロク……シロクマ？

「犬ではにゃいか」

「あれぇ？」
かぐらはのんびりと小首をかしげている。
「でもシロクマって呼んだら、ちゃんと振り返ったんだよー」
一体どんな状況で、かの白モフにシロクマと声をかけるタイミングがあったのか気になるところではあるが、聞いても意味不明に違いない。
しかし以前のことを報告しても、今すぐ実行して証明しないのは悪いくせだぞかぐら。
仕方がないので、吾輩は江崎さんちの庭に足を踏み入れたにゃ。
「おい、そこのシロクマ」
「なんだ？」
なんと、シロイヌはすんなり振り返ってきたにゃ。お前間違ってる、分類科目を間違ってるにゃ。
あっけにとられていると、江崎さんちのわんこがくすりと笑ったにゃ。
「こいつは名前がシロクマなんだ」
「にゃんと！　犬に熊とつけるとは、人間とはなんと身勝手なことか」
「そんなことを言うな。自分の主人だって龍夫という名前だし、歴史上には龍馬とかいう不可思議な動物をイメージしそうな名前だってある」
江崎め、そんな著名な人物を引き合いに出されても困るニャ。
人が馬・龍・虎の文字を名前に入れるのは、強くあるようにという気持ちを盛り込んだ結果ではないか。
「きっと強くなるようにって意味でつけられたんだよぅ」
今し方吾輩が考えていたことを、かぐらがのんびりと口に出した。
確かに熊も強そうなイメージではある。ではこの名前は、飼い主の愛ゆえに名付けられたものにゃのか。
吾輩はシロクマにちょっと質問してみたにゃ。
「して、シロクマは自分の名を気に入っておるのか？」

「それこそ僕が毎日悲嘆している原因だよ」
シロクマはシュンとうなだれた。

愛というのは、わからんものだにゃ。

勇気ある者・にゃ

「ふにゃーーーーっ」
おいらは思わず叫んだにゃ。
そしたら、今までおいらをつついていたカラスは、バッサバッサと飛んでいってしまったにゃ。

おいらの名前はかぐら。しがないミケ猫にゃ。

「どうしたのにゃっ？」
おいらの叫び声を訊いたからか、前方から黒猫がタッタカタッタカ駆け寄ってきたにゃ。あの姿は間違いにゃい、悪友のたまゆらだにゃ。
「にゃあー、カラスに襲われたにゃー」
「カラス？！　なんでかぐらはそんなに鈍臭いのにゃ」
「これでも頑張って戦ったのにゃ」
さっきの戦いは、ここ数年あるかないかと言われるくらいの激闘だったにゃん。
たまゆらに言っても一笑して終わりそうなので、この言葉はふせておくけどにゃ。
「ふみゅー。して、ケガはにゃかったか？」
たまゆらのその質問に、おいらは頷いたにゃ。幸いケガはなかったにゃ。でも……。
「でも、首輪を盗られてしまったにゃ」
赤いひもに、小さな金の鈴がついているのにゃ。おいらが走ると、首のところでチリチリ鳴って、にゃんだかハッピーな気分になるにゃ。
思い出して顔がふにゃんとなりそうだったけど、たまゆらの前だと思い返して、きりりとしかめる。目の前のたまゆらはちょうど驚

いたところだったにゃ。
「首輪？！　そんにゃの、してたのか？　ノラ猫にゃのに？」
「付けてたにゃ。あれがにゃいと、はっぴーじゃにゃいのにゃ。おいら、今から首輪を取り戻しにいくにゃ」
　またにゃ、と言って、おいらはたまゆらに背を向けたにゃ。
　これは、おいらとカラスの戦いだにゃ。誰ひとり、巻き込むわけにはいかないのにゃ。
「ちょっと待つにゃ」
　すると、たまゆらが声を掛けてきたにゃ。
「にゃんだ？おいらは先を急ぐのにゃ」
「かぐら、あてはあるのか？」
「……にゃいけど……、でも、さっきのカラスの顔なら覚えてるにゃ」
「我が輩にはあてがあるにゃ」
「にゃ？！」
　たまゆらはとても物知りで、いつもいろんなことを教えてくれるけど、首輪の場所までわかるのにはびっくりだにゃ。
　たまゆらは神妙な顔で、言葉を続けたにゃ。
「さっきのカラスはこの辺で有名なイタズラカラスだにゃ。ヤツは、回収したものを、ある場所にまとめているのにゃ」
「ある場所？」
「……江崎さんちの庭先だにゃ」
「……っ」
　おいらは驚きすぎて、声も出なかったにゃ。江崎さんちといえば、あのでっかいワンコがいるところではにゃいか。
「それでもおにゅしは行くのか？」
「……」
　行くのか。
　たまゆらの台詞が、最後の審判のように聞こえるにゃ。

江崎さんちの番犬と対峙すれば、おいらは命を落とすかもしれにゃい。
でも、あにょ首輪には、とっても大切なモノが詰まってるにゃ。
忘れたいような、忘れたくないような、そんなたくさんの思い出が詰まってるのにゃ。
だったら、ココロはもう決まってる。
「たまゆら。おいらは鈍臭い猫だけど……それでも、守り抜きたいモノはあるにゃ」
「そうか……ならば、止めぬ」
「ありがとう。たまゆら」
おいらは一言お礼を述べると、今度こそたまゆらに背を向けたにゃ。
「じゃあな、またにゃ」
そんなおいらに、たまゆらは一言だけ声を掛けてくれたにゃ。
またにゃ。
……またがあるのかはわからにゃいけど。
でも、再会を予感させる言葉も、たまにはいいモノだにゃ。

おいらは、戦いに行くのにゃ。
命を賭けた戦いだにゃ。

死にゆく君へ・にゃ

吾輩は猫にゃの。ノラ猫にゃの。
名前はたまゆら。
家猫だったこともあるけど、そんにゃのは遠い昔。今はノラ猫生活にゃ。

どんくさい悪友かぐらが、イタズラカラスに首輪を盗られてしまったにゃ。
でもかぐらのヤツ、どんくさいくせに強情っ張りで、1匹で首輪を取り返すとか言い出したにゃ。
とりあえず、イタズラカラスの拠点を教えたものの、今回はにゃんだか嫌な予感がするにょだ。
相手はたかがカラス。されどカラス。
さっきは突っつかれても平気だったとしても、次が同じ結果になるとは限らにゃい。
それが、考える力を持つ生き物同士の闘いであり、生命を持つモノ同士の道理にゃのだ。

にゃんて、難しいコトを考えている場合ではにゃい。
この不吉な予感が的中する前に、かぐらの元にかけつけにゃければ。
吾輩は目的地にむかって走り出したにゃ。
しかし、走っても走っても、江崎さんちに辿り着かにゃい。
いつもはこんなに遠かったか。
駆け抜ける商店街から、鯛のニオイがする。
悪い予感は消えない。
横切る公園から、キンモクセイの香りがする。
悪い予感はまだ消えない。

通り過ぎる山田さんちから、サンマの焼けるニオイがする。
悪い予感は強くなる。
走って、走って、走って。
ようやく江崎さんちが目の前に現れたにゃ。そのまま、垣根にダイブ。
「かぐらっ」
その名を呼んで庭先に飛び込んだが、肝心のかぐらがいない。
吾輩は江崎さんちのワンコに問うた。
「かぐらはっ？」
ワンコは答えはしなかったが、無言のまま上空を見上げたにゃ。
吾輩も見上げると、高い木の上で、カラスに突っつかれているかぐらの姿を発見した。
とてもじゃないが、見てられない。
「かぐらっ。もう止めるにゃ！」
しかしかぐらも負けていなかったにゃ。
木の枝先からカラスに飛びかかると、その手を勢いよく振り下ろす。
かぐらの爪は、カラスの首に上手く食い込んだにゃ。
カラスは断末魔の叫びをあげた。
力を失い、その黒い体はそのまま地面に真っ逆さまにゃ。

でも、カラスに手をかけてたかぐらはどうなる。

そんな考えがよぎった瞬間、かぐらもまた、重力に逆らうことなく、高いところからあっという間に墜ちて。
その小さい身体が、その背中が、勢いよく地面にたたきつけられた。
「かぐらっ」
駆け寄ると、かぐらは細い声で話しかけてきたにゃ。
「く……首輪は、無事？」

「かぐら、安静にするにゃ。首輪はここにゃ」
「たまゆら。息苦しいよ、たまゆら」
もしかして、肋骨が折れてしまったのかにゃ。
肺か心臓にキズが入っていたら大変だにゃ。
「吾輩の前のご主人様に頼んで、病院に連れて行ってもらうにゃっ」
するとかぐらは弱々しく笑った。
ゆるゆると首を横に振る。
「たまゆら。おいらは……ノラ猫にゃ」
「大丈夫にゃ、大丈夫だから。病院に連れて行ってもらえばっ」
「ありがと、たまゆら。なんだか、眠いにょ……」
そう言うと、かぐらは大きなあくびをひとつした。まるでこの世で最期の空気を堪能するかのように。
それから、眠るようにすぅっと瞼を下ろしたにゃ。
そう、眠るように。
「かぐら？　かぐら？」
揺さぶったが、反応がにゃい。
「魚捕りに行くにょ。いい川を教えてもらったにゃ」
かぐらは、目を開けない。
「そうだ。ビー玉で遊ぼう。おにゅしに騙されて手に入れたビー玉にゃ」
話しかけるけど、返事はない。
「今度一緒に、ドワーフの村に行こう。あの話は嘘じゃないにゃ」
水は毎日飲んでるのに、ノドが枯れてしまいそうだにゃ。
「何とか言え、かぐら」
もちろん返事なんてあるハズがない。
わかってる、わかってるにゃ。
かぐらに話しかけていると、江崎さんちのワンコが寄ってきたにゃ。
口には一輪の彼岸花。庭の端に咲いていたのを、手折ってきたようだ。

ワンコはその紅い花を、静かにかぐらにたむけた。
「ワンコ……」
それからワンコはそっと、吾輩に赤い首輪を巻いてくれたにゃ。

吾輩は猫にゃ。ノラ猫だにゃ。
だけど、訳あって赤い首輪をしてるのにゃ。
走ると、首元で金色の鈴がチリチリ鳴って。
かぐらの忘れ形見の、赤い首輪にゃ。
「チリチリ鳴って、にゃんだかハッピーな気分になるにゃ」
ヤツはそう言ってたけど。

ちっともはっぴーな気分ににゃらにゃいのは何故かな、かぐら。

長い夜の過ごし方

冬はキライ。
昼よりも夜の時間が長いから。冬はキライ。

「たまゆら。また来たのか」
目の前のわんこが苦笑混じりのため息をついたにゃ。
吾輩はにゃんこ。名前はたまゆら。色は黒。
「たまたま通りかかっただけにゃ」
吾輩は目の前のワンコから、ぷいと顔を背けたにゃ。
このワンコは……名前は知らない。ただ「江崎さんちのワンコ」と吾輩たちは呼んでいた。
まぁ、ちょっと前の話だけどにゃ。
江崎さんちのワンコは、この世でいちばん怖い生き物だ。
デカくて強い。それも理由の1つだけど、いつもゆうゆうと眠っていて、かと思えば、いつの間に集めたのかというほど情報を持っていたりする。そんな得体の知れない怖さがあるにゃ。
そんなワンコから少し離れたところに、吾輩は座り込んだにゃ。
「にゃあ江崎。おにゅしは一体、どれくらい生きているのだ？」
ふと、そんな疑問がわき起こった。
「……覚えてないな」
「ふぅん」
「たまゆらは家ネコ1年、ノラ2年……といったところか」
ギクリ。
いや別に隠すようなことでもないが、そう正確に言い当てられてしまうと、少々驚いてしまうにゃ。
「かぐらはノラ2年だな」
ワンコの口から懐かしい名前が出た。
今はその名を呼んでも返事がない、ただの単語になってしまった

名前だにゃ。
「かぐらは1年半だにゃ」
「そうか。短かったな」
「そうでもない。猫は3日で忘れるからニャ。日の長さなんて関係にゃい」
「都合のいい生き物だな」
ワンコのその言葉には応えず、吾輩は立ち上がった。
それからくるりと背を向ける。
「またにゃ」
「また来るのか」
むむ。なかなかくえないワンコだにゃ。
「もう来ない。絶対来ないにゃ」
「冗談だ。気が向いたらいつでも来るがいいさ」
「覚えてたらにゃ」
「本当に都合よくできてるな」
ワンコはそう言うと、苦笑混じりのため息をついてその場に座り込んだ。
「江崎。冬の夜は長い。カゼなぞひくなよ」
吾輩はそう言いながら垣根の下に潜り込む。
「お前も早く寝床に戻れ」
そう言ったワンコの台詞にしっぽを振って応えると、吾輩は江崎邸を後にしたにゃ。

夜はまだ長い。
今度はどこへ行こうか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9715o/

ノラネコデイズ

2010年11月17日14時25分発行